夕焼け通信 1374号　2022.10.31
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）120

木幡智恵美

冬（1）

今年の冬は、気温が低く、降雪量も多いという予報だ。師走に入り、最高気温が十度ちょいの日が続いた。幸い玉湯に行く日の予報気温は高く出ていた。

実歩も宗矢もまだ朝食中。宗矢はミカンをむいた皮を差し出し、「かわ」と言った。自分のことを「ちゅう」、寛大のことは「かんかん」と言う。「みほ」は難しいらしい。

娘と、実歩、宗矢を送り、まずは寛大の宿題に付き合う。その後、絵を描いた。虫の図鑑を見ながら、スズメバチ、カマキリを描き、魚の図鑑からはカジキを選んで描いていた。

晴れてはいないものの暖かいので、外へ出てボール蹴り。オフハウスで買ったもので、重くて跳ねないが、庭で蹴るにはちょうどいい。しばらくして、今度はバドミントン。家の屋根や車庫の上まで飛ばさないよう気を付けていたのに、車庫の上に乗ってしまった。

「この前、お父ちゃんが上がって取ったよ」と、寛大が折り畳み式の脚立を指さす。「ここをこうして」と、組み立て方を教えてくれた。忠ちゃんがするのを見ていたらしい。車庫の屋根の一番低いところに脚立を立てかける。危ないので寛大に上らせるわけにはいかない。「ばば、おれが持っちょくけん」と寛大が下を支えてくれる。ゆっくりと上まで行き、屋根の上を見回すと、中央より向こうに薄緑の羽が見えた。屋根に膝を掛けると、少し揺れる。背筋に冷たいものが走る。日御碕灯台の上で長男にしがみつき、蒜山高原の観覧車の中では二男の膝の上に伏せていた自分の姿が蘇る。羽を取る一心でここまで来た私は、実は高所恐怖症だったのだ。揺れを気にしながら、震える膝を進めていく。羽の位置までが長い。ようやく羽を手にし、ゆっくりと後ずさる。そして、脚立に足を、寛大には「持っててね」と声を掛け、慎重に降りて行く。「バドミントン、もうやめようね」と言うと、肩から力が抜けた。

その日は早めに昼食を摂り、歯科へ。寛大の歯の矯正のためのマウスピースを取りに行き、つけ方などを聞いてきてくれと娘に頼まれたのだ。これまで見て来た針金で組んだようなものではなく、弾力のあるプラスチックみたいなものだ。寝ている間と、日中一時間程度口に入れるのだそうだ。口をとめるテープと、説明された言葉をしっかと受け取って帰った。

がらがら橋日記

宮森健次

種まきとビル・エヴァンス

十月半ばを過ぎた辺りから収穫が始まった。八月の終わりに言われるままままいた種が、ふた月ほどで次々実り始めた。Mさんに出会うまで自分が野菜を作るなどつゆほども思っていなかった。今は家庭菜園がちょっとしたブームだから、珍しくもない展開なのだろうが、それ以前と以後を画すいろんな変化を感じている。

まず、スーパーに行く頻度が半分以下に減った。それまでほぼ毎日通い、退職後の楽しみの一つとまで意識していたのに、だ。何を作るか決め、それに必要な食材を買うとき、無駄なく生かせる買い物ができたか、思い切った贅沢がそれに見合った味をもたらしたか、安い物に手を出しただけのお得感が得られたか、そんな自問を繰り返すことが、家事を上達させると考えていた。それが変わった。収穫した物を日々食べ、さらにそれに飽きが来ないためにはどう料理したらよいのかと考えるのだ。これまたずいぶん小さい変化だことよと笑われそうだが、料理のできあがりから食材を求めるのと、食材からできあがりを構想するのとは思考の順序が逆なのである。日々料理を作る人は、その両方を当たり前のこととして操るのだろうけど、長い間食事を妻に任せっきりだったぼくにとっては、まだ蒙が啓かれていく途上だ。

細かいことついでに食費を見てみると、スーパーに行かないぶんだけ約三割支出が減った。畑で作るのにもお金がかかるから、単純に節約になったとは言えないのだが、自分で生産して自分で消費するのだから、流通にかかる諸エネルギーの節約にはなっているし、わずかながら家計も助かる。

自分で育てた野菜は格別、とはどの教本の巻頭言にも登場するのだけど、その日取ってきた野菜を鍋や小鉢の中に見つけて口に運ぶとき、食材が繰り出す味わいの奥行きが、播種から共有した時間のぶんだけ増しているような気がする。

朝からカラッと晴れた日は、畑でちょっと時間のかかることをしたくなる。バックパックに手袋など詰めていると、山に行くときみたいな気持ちになった。ラジオを聞きながら蕪の種を播くことを思いついたら、もっと気が逸った。

日に光る草の上にラジオを置いた。オンブバッタが跳ねた。FMを流し、畝と溝をこしらえ、蕪の種を播く。胡麻が巨大に見えるような微小な種なので、息を詰めて一粒ずつ落としていたら、ラジオからビル・エヴァンスが流れてきた。まるで蕪の種が指となってふっくらした土を弾き「レッツ・ゴー・バック・トゥ・ザ・ワルツ」を弾いてるみたいだった。

30代フリーター　やあ、ジイさん。中国共産党の新しい指導部は習近平に忠実なメンバーで固められ、「習1強」体制が完成した、と報じられている（10月24日朝日新聞朝刊）。中国は「帝国」としての体制をいっそう強固にし、習はその「皇帝」に即位したということか。

年金生活者　中国が経済の近代化を遂げながら、政治的には前近代的な「帝国」の体制を強化している背景としてふたつのことが考えられる。

ひとつは経済のグローバル化だ。1国だけでは経済をコントロールできなくなり、国連やEU、G7といった国家間システムにそれを頼らざるを得なくなった。その結果、国家からその権力の一部が離れ、国家間システムに移った。領域内にさまざまな勢力を抱え、周辺に服属国を持つ「帝国」は国家間システムの一種であり、当然そこにも権力が移った。

「帝国」の場合は同じ国家間システムでも、対等な主権国家どうしが連結したそれとは異なる。中心となる国家があり、それに服属する国家がつらなる。グローバル化の進展にともない、国家から権力の一部が流出して国家間システムに移っても、それはシステムの中心をなす国家に還流する。それが中国の国家権力を強化する作用をしている。このことはプーチンをツァーリとする「帝国」としてのロシアについても言えるはずだ。

30代　もうひとつの背景は？

年金　戦争だ。戦争は国家への権力の集中を促す。その集中の度合いが「帝国」と「主権国家」である西側諸国では異なる。

アメリカをはじめ民主化した「主権国家」、言い換えれば「国民国家」は戦争に強いのが特徴だ。国民は国家を王や皇帝のものではなく、自分たちのものと考えるので、自らの手で国を守ろうとする気持ちが強い。その力が第1次世界大戦で古くからの「帝国」を弱体化させた。

だが、資本主義の高度化はそうした「国民国家」の強みを次第に奪っていった。選択的消費が消費支出の過半を占めるようになり、自立意識を強めた国民は国家を頼りにする気持ちを低下させ、そのぶん自らの手で国を守ろうとする気持ちを以前ほど強く持たなくなった。アメリカがアフガニスタン戦争、イラク戦争を経て戦争遂行能力を著しく低下させたのは、その結果と言える。

これに対し、「帝国」、とりわけ中国では経済のグローバル化、デジタル化によって国家への権力の集中が進みやすくなった。グローバル化で国家から分散した権力は「帝国」に還流し、デジタル化の進展は個人や個々の企業を監視する社会を出現させた。それを加速しているのがアメリカとの「無血の戦争」だ。

30代　前近代的な「帝国」が世界第2位のGDPの大国に成長したのは「歴史の謎」として残るのではないか。

年金　ヘーゲルの「理性の狡知」を真似て「歴史の狡知」を想定したくなる。ソ連という自由なき「帝国」が70年ものあいだ存続したのは、それに対抗する西側諸国に社会保障政策を広げさせるためだったのではないか。中国という抑圧の「帝国」が経済大国に成長したのは、独裁下のほうが効率よく進められる社会のデジタル化、AI化を進展させるためだったのではないか。そしてそれらはいずれも「歴史の狡知」が仕組んだことではないか、と。

「歴史の狡知」が大げさなら「資本主義の意思」と言ってもいい。資本主義は労働者を搾取の対象としてだけでなく、生産された商品の買い手として必要としている。搾取するだけだと、労働者は商品を買えなくなるから、富を再分配しなければならない。そのために社会保障政策を国家に求める。「平等」の旗を掲げるソ連はそれを西側諸国に促す役割を果たした。

資本主義はいま新たな利潤の源泉を求めて、社会のデジタル化、AI化をやりやすい独裁国家をあと押しし、その成果が西側諸国をデジタル化、AI化にいっそう駆り立てることを狙っている。そんな「意思」を感じさせるほど中国の膨張は進んでいる。

30代　アメリカと中国の「無血の戦争」は時代をどんな段階へ推し進めるだろうか。東西冷戦がもたらした世界の工業化の進展に匹敵するような変化を現在の戦争は引き起こすだろうか。

年金　東西冷戦がもたらした工業化の中には米ソが競った宇宙開発を含めることができる。当時の宇宙開発は採算の合うプロジェクトではなかったので、市場にまかせていては進展せず、国家が担うしかなかった。その成果がいま民間企業による宇宙開発にまで発展しつつある。宇宙は資本主義が利潤の源泉として必要とする辺境のひとつに加わった。

デジタル化、AI化は、冷戦時代の宇宙開発と同様に、自由な市場にだけまかせていては進展が遅くなる。早めようとすれば国家が国民を強制する必要がある。

国家の強制力は戦争をしているときに最も強まる。ただ、その度合いは国によって異なる。「無血の戦争」の一方の当事者である中国は「帝国」であるがゆえに、アメリカより強い強制力を発揮し得る。それだけデジタル化、AI化は早く進み、世界のモデルとなる可能性がある。かつて独裁国家のソ連が世界の宇宙開発をリードしたように。

ニュース日記　852

中村　礼治

「皇帝」の即位